原著

幼保小接続期カリキュラムについての一考察
—5歳児後半期に育てたい力と保育内容—

山 田 秀 江 *

A study of curriculum for connecting Kindergartens Nursery schools to Elementary school
-About the Power to raise and contents of childcare and education in the second half of a 5 years-old child-

Hidemi Yamada

本研究では平成22年度に出された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告書）」と横浜市、東京都北区の幼保小接続期カリキュラムを読み取り、接続期である5歳児後半期に育てるべき力とそれが小学校教育にどのようにつながっていくかを見通し、その時期の保育内容を検討することを目的とした。その結果「生活する力」「学びの力」「人とかかわる力」の三つの力を育てるような保育内容を考え実践することで、小学校教育のスタートをスムーズに始めることができると考えられた。

幼児期の教育に携わる保育者と児童期の教育に携わる教員が互いの子どもの発達特徴や教育内容を理解し合い、接続期のカリキュラムを作成することで、見通しや振り返りに基づいた実践ができ、子どもの育ちも滑らかに進むものと考えられた。

Key words: 接続期カリキュラム、幼保小連携、5歳児後半期、育てたい力

1．はじめに

幼児期の教育（幼稚園、保育所等での教育以下同じ）と児童期の教育（小学校での教育以下同じ）を接続することが重要視され、さまざまな連携や接続の取り組みがなされている。

平成22年度「幼児教育実態調査」[1] によると幼児と児童の交流状況では保育所の幼児や小学校の児童と交流している幼稚園は77.2％あり、そのうち小学校の児童と交流している幼稚園は96.5%であった。また、教員同士、教員と保育士の交流状況では、保育所の保育士や小学校教員と交流している幼稚園は75.2%でそのうち小学校教員と交流している幼稚園は96.0%であった。このように連携の取り組みは全国で広がりつつある。

さらに踏み込んだ連携である教育課程の編成に関する工夫の状況では教育課程の編成に関し、小学校と連携している幼稚園は全体で34.0%である。そのうち公立は44.5%であるのに対して私立では27.7％と低くなっている。平成20年度の同調査[2] では教育課程の編成に関し、小学校と連携している幼稚園は全体で16%であった。両者を比較すると倍以上の比率で増えており連携が進んでいることが分かる。しかし、子ども同士の交流や教職員の交流状況と比較するとまだまだ低い数値である。

この教育課程編成について幼児期の教育と児童期の教育を接続することが今後の連携を進めていくうえで非常に重要であると考えられる。平成20年1月に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」[3] の「6．教育課程の基本的な枠組み」（4）「発達の段階に応じた学校段階間の円滑な接続」の中で、「それぞれの学校段階において、その役割をしっかり果たすことが何よりも重要であるが、それに加え、教育課程の改善に当たっては、発達の段階に応じた教育課程上の工夫の観点から、学校段階間の円滑な接続に留意する必要がある。まず、幼児教育と小学校の接続においては、幼児教育では、規範意識の確立

＊　四條畷学園短期大学　保育学科

などに向けた集団とのかかわりに関する内容や小学校低学年の各教科等の学習や生活の基盤となるような体験の充実が必要である。他方、小学校低学年では幼児教育の成果を踏まえ、体験を重視しつつ小学校生活への適応、基本的な生活習慣等の確立、教科等の学習への円滑な移行などが重要であり、いわゆる小1プロブレムが指摘される中、各教科等の内容や指導における配慮のみならず、生活面での指導や家庭との十分な連携・協力が必要である」となっている。このように幼児期の教育と児童期の教育を接続させるためには発達の段階に応じた教育課程上の工夫の中で移行がスムーズに進むような接続を意識した編成が重要である。

「接続はもてる力を引き出し、新たな世界へ子どもを誘い、子どもがその学びの対象と出会うことによって、さらに視野を広げ力を伸ばすためのものである」[4] と秋田（2010）は述べている。幼稚園・保育園という場から小学校という場に変わることで、子どもを取り巻くさまざまな環境 (人的環境も含む) の変化は大きいが、子ども自身の中ではその発達は繋がっているのである。新たな環境に入ることで今まで培ってきた力を発揮しそれをさらに伸ばすことができるような教育の在り方をそれぞれの立場で考えなければならない。そしてその内容を両者の教職員が共有し明確化していくことで接続期のカリキュラムは作成することができるのである。

そこで本研究では平成22年11月に文部科学省の幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査協力者会議が出した「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告)」(以下報告書[5]やその報告書の内容を踏まえ、実践研究を通して編成された横浜市[6]と東京都北区[7] の接続カリキュラムからその編成にあたって理解すべき子どもの発達や学びの連続性と各時期の違いを検討し、5歳児後半期に育てたい力とはどのようなものか、またそれが小学校教育にどのようにつながっていくかを見通しながらその時期にふさわしい保育内容を検討することを目的とする。

2．幼児期の教育と児童期の教育の違い

幼児期の教育と児童期の教育において顕著な違いは発達段階に配慮した教育課程の構成原理の違いである。

幼児期の教育には幼稚園教育要領・保育所保育指針の中で5領域という区分を設け、5歳児修了までに育つことが期待される心情、意欲、態度についてねらい内容が示され、それに基づき各幼稚園、保育所が教育課程、保育課程を編成している。「～ができる」「～を理解する」などの具体的な到達目標を記した児童期の教育と大きく異なるところである。

また、幼児期の教育は子どもの生活や経験を重視する経験カリキュラムであることに対して児童期の教育は学問体系の獲得を重視する教科カリキュラムを中心に展開されるところも異なる点である。

この違いは教育方法や教育環境、指導方法の違いともつながっている。幼児期の教育は遊びを通して行われ、保育者は子どもの発達や興味関心などを読み取り、その時期に育てたい姿と絡み合わせて子どもが遊びこめる環境を構成する。そして遊びの活動をよく観察し個々に応じた援助をするものである。子どもは自ら興味関心をもったことに主体的に取り組み、活動することで5領域に含まれる様々な力を培い学びを深めていく。それはこれから○○を学ぶという目的や自覚があるのではなく、その遊び自体が目的となる中で力を付けていくのである。

教育時間についても日々の生活の中で柔軟に対応でき、登園し持ち物の始末をした後から昼食前の片づけの時間まで約1時間半～2時間程度遊びを中断することなく続けることができ、子どもたちが一つの遊びをやり遂げるゆったりした時間を持つことができる。これだけの時間があっても遊びに夢中になっている子どもたちには短いと感じ、一つの遊び（工作や砂遊びなど）に集中して遊び続ける姿が多くみられる。

また、教育環境においても保育者がつくった教育的環境の中で自分の好きな場所や好きな遊びができる場所を見つけ主体的に遊びを進めていくことができる。自分で選択できるという自由度が高い。

児童期の教育では1単位45分間を基礎に時間割があり、自分の教室や特別教室などその時間にふさわしい決められた場所があり、子どもたちが各教科の到達目標を達成できるよう教員は指導方法を工夫することが重要となる。

これらの違いは子どもの発達段階の違いによるものであるが、それを接続期にいきなり異なる教

育を行うとその繋ぎ目で綻びができるのは当然のことである。5歳児の3月と1年生の4月は子どもにとっては連続しているものなので、接続期にある子どもの状況を詳しくとらえ、そこを意識したカリキュラムは当然必要なものである。しかしそれは幼児期に小学校の授業形態や教育内容を先取りしたり、児童期に幼児期と同じような方法で教育活動をしたりするなどどちらかの教育に合わせるような見せかけだけの接続では意味がない。それぞれの違いを踏まえつつ子どもの発達に応じた学びをいかに連続させていくかを考え接続していくことが重要である。

３．学びの連続性

報告書では「幼児期から児童期にかけては、学びの芽生えの時期から自覚的な学びの時期への円滑な移行をいかに図るかが重要となる。」[8] とある。幼児期は子どもが学びを意識しているのではなく、さまざまな遊びに集中して取り組む中で子ども自身の自覚のないところで学んでいく。児童期は学ぶということの意識があり学びの時間（授業時間）とそうでない時間（休み時間等）の区別がある。また、各授業の内容を理解し系統立てて計画的に学習を進めることができる。

接続期は子どもたちが学びの芽生えから次第に自覚的な学びへと発展していく時期となる。

そこで幼児期の教育では遊びの中で課題を見つけ、調べたり比べたり挑戦したりしてその課題を解決していく道筋から自覚的な学びへとつなげることが大切である。また、クラス全体で共通の目的をもって活動を展開し、自分の役割を理解し、集団の一員としての意識を高めるような活動を行ったり、今まで遊びを通して学んできた知・徳・体の芽生えを総合化し小学校へ向けて学びを高めていくための教育課程の編成、実施が必要になる。

また児童期の教育では今まで培ってきた学ぶ力を基に自覚的な学びの確立を図りながら、まだ行きつ戻りつしている学びの様相をとらえ、幼児期のような好きな活動に没頭する中で見出す学びの力を自覚できるような働きかけや、学ぶ楽しさや意欲が高まるような働きかけが必要である。また、学校生活の流れや集団行動のルールが理解できるように段階的な指導を行いつつ、児童が興味関心をもった活動を主体的に取り組んでいきながら学習を深めていくための教育課程の編成、実施が必要になる。

そこで接続期の教育課程編成における留意点を考える。

４．教育課程編成上の留意点

報告書によると「三つの自立」と「学力の三つの要素」という視点を挙げている。[9]

「三つの自立」とは「学びの自立」、「生活上の自立」、「精神的な自立」でありそれぞれ「学びの自立」とは自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる活動を自ら進んで行うとともに、人の話などをよく聞いて、それを参考にして自分の考えを深め、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現することである。「生活の自立」とは生活上必要な習慣や技能を身に付けて身近な人々、社会及び自然と適切にかかわり、自らよりよい生活を創り出していくことである。「精神的な自立」とは自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくことである。それらの三つの自立を幼児期（特に幼児期の終わり）に養うことが学びの基礎力の育成において重要であると述べている。これらの三つの自立を養うにはどのような保育者のかかわりや援助、環境構成が必要なのであろうか。

「学びの自立」では幼児が興味関心をもった活動ができるよう環境構成し、その活動が幼児の力で展開できるよう保育者は認めたり励ましたりアドバイスをしたりするなどさまざまな方法で援助する。そうして幼児が自己発揮できるようかかわることを積み重ねていくことで養うことができる。

「生活の自立」では、まずは保育者がよりよい生活者として子どものモデルになるような振る舞いをすることが重要である。さらに、よりよい生活ができるよう生活上守らなければならない事柄を明確に伝え、一人一人の子どものその時その時の状況に応じて適切に援助し自分でできることの充実感や達成感が味わえるようにすることが大切である。決して無理強いや押し付けでなく、子ども自ら気づき行動できるように根気よく援助していくことで自らよりよい生活を創り出すことができるようになる。

最後の「精神的な自立」では幼児期に安心して

生活し自分のやりたい活動に集中して取り組み、試行錯誤や工夫をしながら遊びを発展させ、達成感や充実感を味わう経験を重ねることが重要である。そうして幼児は自分に自信をつけ、自分の良さを知ることができる。また、友達とともに同じ目的に向かい活動することでそれぞれの良さを知り役割分担しながら目的を達成するため協力して活動することができるようになる。そういった活動を通して将来に期待を持ち前向きに生活していく態度を養うことができる。

一方児童期及びそれ以降の教育においては、具体的な資質や能力を育むという観点から、学校教育法第30条に規定されているように、生涯にわたる学習基盤の形成、すなわち「基礎的な知識・技能」、「課題解決のために必要な思考力、判断力、表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」の育成に特に意を用いなければならないとされている。これらは「学力の三つの要素」と呼ばれるものであり、先に述べた「三つの自立」とともに。児童期の教育において、学びの基礎力の育成を図る上で重視されるべきものであると述べている。

さらに、幼児期から児童期にかけての教育においては、学びの基礎力の育成を図るため「三つの自立」を養うことに重点を置くとともに、児童期の教育においては「学力の三つの要素」を培うことを重視する必要がある。幼児期の終わりには「三つの自立」を養う必要があり、それが児童期の「三つの自立」と「学力の三つの要素」の育成にどうのようにつながっていくのか見通すことが重要であると報告書では述べている。[10)]

そこでこの視点に基づいて接続期の教育課程を編成した横浜市と東京都北区の接続期カリキュラムを参考に児童期の教育を見通した幼児期の教育の在り方について検討する。

5．接続期カリキュラムの実際

2012年3月に出された横浜市の「横浜版接続カリキュラム」[6)] では接続の時期を5歳児10月頃から1年生7月頃までと捉えている。幼稚園、保育園で取り組むカリキュラムを「アプローチカリキュラム」小学校で取り組むカリキュラムを「スタートカリキュラム」と呼んでいる。乳幼児期から接続期を経て小学校以降の学びにつなげていくための視点として「主体性」「志向性」「かかわる力」 という三つの視点をとらえ接続期のカリキュラムに反映している。また、接続期カリキュラムでは育ちや学びを支え続けるものとして自己肯定感を大切に考えている。情緒の安定に基づいて三つの視点での学びをつなげていくことで自己肯定感を実感させながら活動や学習を進めていき、将来にわたる人格形成の基礎を培うこととしている。

「アプローチカリキュラム」では「学びの基礎力育成」をねらいとし、これらの学びを見通しながら小学校への連続性・一貫性を図るとしている。「学びの基礎力」については報告書にある「三つの自立」を養うことと捉え、それを育成する時期は発達特性の共通性から小学校低学年までを一つの繋がりとして捉えている。この「三つの自立」は幼児期の教育との連携を図る上で重要な役割を果たす小学校低学年の生活科の目標に通じており、学びの連続性や一貫性を図るようにしている。

さらに学びの基礎力育成のための具体的な活動の柱として次の三つを提示している。「協同的な遊びや体験の充実」「学びの芽を大切にした活動の充実」「就学への期待をもつ活動の充実」。これら三つの活動の柱は小学校の学びにどのようにつながり活かされているかを明示している。「協同的な遊びや体験の充実」は学習や生活の基盤となる学級集団を一人ひとりが形成できる力を育むことにつながっている。「学びの芽を大切にした活動の充実」は児童が様々なことに興味・関心をもち、問題解決的に学んでいく主体的な学びの姿勢につながり、しいては学習の定着にもつながる。「就学への期待をもつ活動の充実」は小学校に向かう気持ちを安定させ、安心して学校生活全体に取り組む気持ちを育む。以上のようにそれぞれの活動は幼児期の子どもの実際の姿や発達の状況に応じた活動であり、それぞれの活動の充実は小学校における学びや生活に連続性・一貫性をもって確実につながるとしている。

また、このアプローチカリキュラムの特徴として幼児期の教育で育てたい「ねらい」とアプローチカリキュラムの「活動の柱」を市内各園での共通事項として明示し主な活動や子どもへの配慮、環境設定などは各園のこれまでの取り組みに基づき編成するという点である。各幼稚園や保育園では今までの「ねらい」や「内容」を「活動の柱」や「三つの視点」に照らし合わせて見直していく

作業を通して教育課程を編成していくことができ、無理なく接続期の子どもの日頃の保育を見直し、小学校への繋がりを意識しながら編成することができる。

2013年3月に出された東京都北区「保幼小接続期カリキュラム」では、こちらも接続期として5歳児後半（10月～3月）から小学校1年生（4月～7月）までの時期を接続期と捉え、この時期に焦点を絞ったカリキュラムとなっている。

五領域にわたる遊びを中心とした活動を「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」の三つの視点からとらえ、「幼児期に育てておきたい力」とそのために「経験させたい内容」と「入学期に育てたい力」を示すカリキュラムとしている。

接続期カリキュラム作成は幼児が小学校生活や教科を中心とする学習に適応する基礎を培うことを目的とし、小学校の生活や学習に滑らかに適応する基礎となる心情・意欲・態度を養うとしている。またこのカリキュラムは「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」の三つの視点から「5歳児10～12月期」「5歳児1月～3月期」「1年生4月～7月期」の各期で「経験させたい内容」を一覧にまとめてある。

このカリキュラムは活用の便を図るために「視点別カリキュラム一覧表」と「期別カリキュラム一覧表」の2種類に分かれている。「視点別カリキュラム」では視点別に各時期の「経験させたい内容」を見ることができるので保育者が小学校以降で「経験させたい内容」を見通し、今の子どもたちにどのような活動を経験させるのか保育計画を作成するうえで役立ち、小学校教員にとっては幼児期に「経験してくる内容」を知ることでそれを踏まえて児童期にふさわしい教育の展開を考え、指導計画に活かしていくことができる。「期別カリキュラム」では各視点での「経験させたい内容」を時期別に見ることができるので保育者や小学校教員が具体的な指導計画を作成する上で役立つものである。こういった工夫が日々忙しい中でも子どもの発達の見通しに基づいた接続期の具体的な指導計画作成に役立ち、日頃の実践に結びついていくカリキュラムであると考えられる。

6．5歳児後半期に育てたい力と保育内容

報告書やこれらの接続期のカリキュラムから見えてくる接続を意識した5歳児後半期に育てるべき力とそれがどのように児童期につながっていくのかということを考察すると次の三つの力が浮かび上がってきた。

一つ目は「生活する力」である。0歳児から少しずつ発達し獲得していく食事、排泄、着替え、身の回りの清潔など基本的生活習慣が5歳児後半期は個人差があるものの一通り習得できている時期である。さらに日々の生活中で見通しを持ち、健康安全に留意しながら自分で考え行動することができ、幼稚園や保育所等での集団生活の約束事を守ろうとする時期でもある。このように自らよりよい生活を創り出すことができる時期である。

この力は小学校入学以降の環境の変化に柔軟に対応し、学校生活に必要な約束事やきまりを守り安全に生活できることにつながっていく。

具体的な体験としては幼稚園や保育所等で生活に必要な約束事を子どもたちが考えそれを自ら意識して守れるような機会を作ったり、当番活動などみんながより良い生活を送るためにできることを考え、それを責任を持って行える環境や援助があるとよい。子どもが決められたルールになんとなく従うのではなく、主体的に活動する中でそのルールの必要性に気づきより良くなるよう考え、話し合い作っていくという経験が大切である。

二つ目には「学びの力」である。幼児期の発達に応じた学びは自ら興味関心をもった事柄に取り組む中で課題を見つけ、主体的に取り組み試行錯誤しながら乗り越え、満足感や達成感を味わうということを通して身につく。そこで五歳児後半期には今まで遊びの中で総合的に身につけた様々な学びの力を思考力、表現力、言葉を使う力などに結びつけ、これまで遊びの中で感得した法則性や言葉、文字、数量的な関係などを組み合わせて課題を解決したり場面に応じて適切に使ったりする活動を経験することが大切である。これらの経験は小学校以降の教育内容に対して興味関心を持って取り組むことや言葉や文字、数字などの意味を理解し学習の中で活用していく力となる。

三つ目には「人とかかわる力」である。五歳児後半期では友達とのかかわりが深まり、友達と一緒に遊ぶことが何よりも楽しくなっていく時期である。思いのぶつかり合いでトラブルになることもあるが、話し合うことでお互いの気持ちを理解

し合い赦し合うことができ、保育者の仲立ちがなくても自分たちの力で解決できるようになる。

またクラスという大きな集団の中で、友達の良さを認め合い、自分の役割を考え自分の良さを活かし、互いに足りない部分を補い合いながら活動を進めていくこともできる。

具体的な活動としては五歳児が中心となって幼稚園や保育所等全体でお店屋さんごっこをしたり、生活発表会などでクラスで一つの劇遊びを発表したりするなど協同的な体験が重要である。

こうした活動は小学校以降の学級集団での学びや新しい友達とのかかわりなどをスムーズに進めていくことにつながっていく。

これら三つの力を保育者が意識して保育のねらいを立て具体的な内容を計画していくことで、児童期の教育につなげていくことができる。

もちろん就学直前の子どもたちには就学への期待がもてるような児童との交流活動や学校訪問なども積極的に取り入れていくことで安心して四月のスタートを切れることは言うまでもない。

７．まとめにかえて

接続期のカリキュラムを編成するためには何よりもそれぞれの施設・学校で働く保育士や教員が互いの教育について理解し深く知る必要がある。人事交流等で幼稚園教諭が小学校へ、小学校教諭が幼稚園へ数年籍を移動し互いの教育について学ぶ機会をもつ地方公共団体も増えてきている。

幼保小の連携を深めるためには、一部の園と小学校の教職員が合同研修を行ったり、短期的な教員や子どもの交流をしたりするだけではなく、その地域全体の幼稚園、保育所等と小学校が実践できるような接続期のカリキュラムを編成する必要性が高い。その作成のためにはまず、それぞれの教職員が互いの立場を実際経験し学ぶことが何より重要である。相互理解を深め、それが基盤となって初めて有効なカリキュラムを編成できるのである。

著者自身も小学校教員から幼稚園教員へ移動の経験があり、小学校教諭時代も一人一人の子どもをよく観て個々に応じた指導を心掛けてきたつもりであったが、幼児期の教育を実践する中で初めて一人一人の子どもを理解することの意味が分かったように感じた。

幼稚園にいる間、常に子どもと共に生活しながら援助し、家庭との連携を取りながら幼稚園以外での生活も知ることで子どもの内面の理解ができるよう心掛けてきた。このように子どもを観ることの重要性を深く学ぶことができた。

接続期にあたる小学校１年生にも授業の中の姿だけでなく休み時間や放課後などの時間の様子も観察しながら一人一人の子どもを理解することがとても重要だということに気づいた。

今後益々こういった人事交流を各地方公共団体が主導で進めていき、公立、私立にかかわらず接続期にいるすべての子どもがスムーズに移行できるような接続期カリキュラムの編成を期待したい。

また、こういった接続期のカリキュラム編成や教育実践に熱心に取り組める人材の育成が重要である。保育者養成校である本学で学ぶ学生たちにも乳幼児期の子どもの学びや育ちだけでなく、幼稚園や保育所等を巣立った後の子どもの育ちにも目を向け、その見通しの元で乳幼児の発達に応じた保育を展開していけるような資質を養うことが必要であり、養成校の大きな責任だと考えられる。

引用文献

（１） 文部科学省 （2011）平成 22 年度幼児教育実態調査 p 13-15

（２） 文部科学省 （2009）平成 20 年度幼児教育実態調査 p14

（３） 中央教育審議会 （2009）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（答申）

（４） 秋田喜代美（2010）幼稚園、保育所と小学校との円滑な接続の意義 初等教育資料 No.856 p8

（５） 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 （2011）幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）

（６） 横浜市子ども青少年局 横浜市教育委員会 （2012） 横浜版接続期カリキュラム 育ちと学びをつなぐ

（７） 東京都北区教育委員会 （2013） ＜北区＞保幼少交流プログラム 保幼少接続期カリキュラム－接続期の教育の充実を目指して－

（８） 前掲（5）p10

（９） 前掲（5）p15-16

（１０） 前掲（5）p16

（１１） 前掲（4）

参考文献
・岩立京子（2012）幼保小連携の課題と今後の方向性
保育学研究　第 50 巻第 1 号　p76-84
・文部科学省　厚生労働省　（2009）　保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集
・山田有希子　大伴潔　教育実践研究支援センター（2010）保幼・小接続期における実態と支援のあり方に関する検討　－保幼 5 歳児担任・小 1 年生担任・保護者の意識からとらえる－　東京学芸大学紀要　総合教育科学系㈱
61：97-108
・善野八千子　（2010）幼小接続期におけるカリキュラムの開発　奈良文化女子短期大学紀要　41　49-67

－ 2013. 3. 12 受稿 、2013. 3. 12 受理－